the People

元気なまちには　元気な主張を続け
元気に行動する　市民がいる

the people（ザ･ピープル）
2012年　6月発行

発　行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田　恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5－6
タウンモールリスポ内
TEL：**0246－52－2511** FAX：38－9538
E-mail：the-people@email.plala.or.jp
ＵＲＬ：http://www.iwaki-j.com/people/

水俣から学ぼう

5月18日から20日まで、いわき市内から８名、そして東京から１名という混成チームで熊本県水俣市を訪問しました。

地元学の吉本哲郎さんに震災後東京でお会いし、「福島は水俣のこれまでに学ぶべきだ」とのお話を頂いたのが昨年の５月のことでした。

「水俣といわき」という取り合わせを怪訝に思う方がおられるかもしれません。皆さんご存知の通り、1956年に公式に発見された水俣病ではメチル水銀による環境汚染により２万人をはるかに越える人が健康を害し、多くの尊い命が失われました。また、偏見・差別によって、結婚や就職ができないだけではなく、水俣の名前ではモノが売れなくなり産業自体が衰退していきました。様々な立場の人々が同居する町の中には混乱が生まれました。40年近くが経過し、これではいけないと市民が立ち上がり、行政・住民が協働して水俣病問題の解決と共存・水俣病の犠牲を無駄にしない環境都市づくりを進めました。長い取り組みの成果が現われ、現在では、水俣は環境首都の称号を得るまでになり、人前で水俣出身と胸を張って言えるようになり、水俣という名前で農産物も売れるようになってきました。こうした長い過程の中に、これからのいわきにとって蔑ろに出来ない教えが込められているというのです。

「水俣に行って学びたい」という思いが、いわき市内で被災者支援・市民レベルでのエネルギー転換・被災地でのスタディーツアー受け入れ・地域産業の再生などの活動に取り組む仲間たちと共有され、熊本県玉名市に本拠地を置くNPO法人「れんげ国際ボランティア会」のサポートを頂いて、今回合同での研修という形となりました。滞在時間はわずか２日にも満たない、駆け足の研修ではありましたが、対応してくださった方々から重みのある言葉を頂き、濃密な時間となりました。

修学旅行などのスタディーツアーを受け入れ、負の遺産で地域に人を呼び込むのなら、研修費用を受けとり被災をある意味「商品」として扱う「覚悟」が必要と語って下さった、NPO法人環不知火ネットワークの吉永利夫さん。

水俣病と向き合ってきた長い歴史の中で、支援者と被支援者がもたれあってきたことで問題を不明瞭にし、大きな過ちを犯してしまったと赤裸々に組織のこれまでを語ってくださった、水俣病センター相思社の遠藤邦夫さん。

水俣病資料館の語り部として自らの体験を語ることを決意するまでの葛藤と、「水俣病」としての認定を得るまでに裁判という手法に頼らず、県に対して10回もの異議申し立てをしてきた体験を通して、正面から問題に向かい合うことの重要性を語ってくださった、緒方正実さん。

「環境モデル都市　水俣」のキーマンとして、「水俣病の犠牲を決して無駄にしない、悲惨な公害を二度と起こさない」そうしたまちを創ろうとしてきた取り組みと、焼酎５合瓶（R瓶）のリユースを進めるといった自社での具体的な取り組みを熱く語ってくださった、株式会社田中商店の田中利和さん。

お一人お一人の言葉に参加者全員が胸を打たれ、明日への活動に大きな力を頂いた研修でした。

そして、今回の研修はそこで終わらず、更なる広がりを見せています。6月15日から３日間、田中さんと遠藤さんを講師として招き、いわき市内で講演いただく機会を設けました。その一つが本会平成24年度定期総会後の記念講演会。「水俣からいわきに伝えたいこと」というタイトルでお二人から貴重なお話を頂きました。

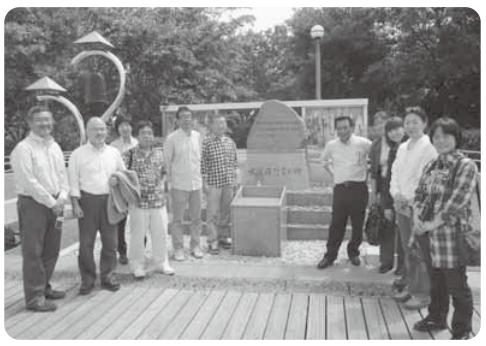
また、７月28日には緒方さんを招いて、「『 水俣 』からいわきの復興を考える」というタイトルでお話いただく予定になっています。その時期に合わせて、水俣市立水俣病資料館で震災後に風評被害にさらされている福島に向けて応援のメッセージ展が行なわれたことを受けて、そのメッセージ展をいわきでもう一度行なう運びになっています。更に、いわきの中高生をこの夏休みに水俣に招待しようというプランも着々と準備が進められています。

水俣が今日に至るまで費やした50年という時間から、いわきが学ぶことは限りなくあるでしょう。その学びをひとりでも多くの市民の皆さんと共有したいと考えているのです。

『 水俣 』からいわきの復興を考える

- **会　期**　平成24年7月28日㈯　18：30～
- **会　場**　いわき産業創造館　会議室１
- **主　催**　NPO法人ザ・ピープル
- **後　援**　3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会
  社団法人いわき産学官ネットワーク協会
- **協　力**　一般社団法人インターナショナル メディカル コープ
  NPO法人れんげ国際ボランティア会

水俣市視察



水俣市の方々がいわき市で講演

つぶやき

出会い　④

「葉っぱのフレディ」を知ってる？小学一年生の孫に聞くと即座に「知ってるよ、保育所で習ったもん」との返事。どうして70歳になる私が今の今までこの物語に出会えなかったのか残念に思う。▼大きな木の梢に春、生まれた葉っぱが冬になって死んでいく「命のたび」のこの物語は、20分のCDにまとめられている。何度聞いても感動の連続。会う人ごとに「知ってる」？と聞いてしまう。私が話し始めると「初めて聞いたわ」と耳を傾けてくれるから、ついつい続ける事になる。いやいやお節介おばさんの話なのでじっと堪えて聞いてくれているのかもしれない。▼春に生まれたフレディは、数えきれないほどの葉っぱに囲まれ、様々なことを学び立派に成長していく。公園に集う人たちに木陰を作ってあげたり涼しい風を送ったり、紅葉して目を楽しませたりと葉っぱの仕事の多さに驚きながらも、幸せで居心地の良い夢のような日々をすごす。10月のある晩、突然寒さが襲ってくる。そして一人残らず木の枝から引っ越す日が近づいていることを知らされる。「春に生まれ、冬には死んでしまうんでしょ。死ぬのは怖いよ…僕には生まれてきた意味があるんだろうか」と泣く。友達のダニエルが「僕たちは葉っぱに生まれ葉っぱの仕事を全部やったね、木のためにも人のためにも立派に役目を果たせたんだ。周りには太陽や月、雨や風がいてどんなに幸せだったか」と励ます。そして「僕も順番が来たら引っ越すよ」と言って静かに居なくなる。この後も死について、命について語られる。▼今日、死などとは全く無縁なような享楽的に生きる若者たちの姿が目立つ。その若者たちの起こす残忍な事件が報道される度に胸が痛む。こうした時代だからこそ死について語ることが大事なのだけれど、若者はもちろん大人たちも死について語り合うことはない。いや避けているのかもしれない。如何にして長く生きられるかといった方策を求め奔走しているように見える。▼やがてフレディは、迎えに来た風にのって枝を離れ、雪の上に静かに降りて行く。なんの傷みも不安もなく目を閉じ深い眠りに入り一生を終える。それは私たち人間へのメッセージのような気がする。高い知識を求め、あふれる情報を追い続ける忙しい生き方よりも、地道でもいいからゆっくりと多くの出会いを求め、経験を数多く積み重ねる生き方をする方がどれほど素晴らしいことか。出会いは友達、動物、草花、宇宙など無数にある。不自由のない恵まれた環境の中で生きる私たち大人でも「出会いをどう見るか」の目線で捉えれば一歩成長できると思う。私にとって「葉っぱのフレディ」に出会えたことは、心の財を積んだ思いで感謝せずにはいられない。

（K）